

## 最優秀賞

### 私の生き方

井上 淑恵

二十八年前……三月九日。

祖父が亡くなり、一人になってしまった夫の片腕になりたくて……私が船に乗った日。

長男が二才、次男が生後二カ月の赤ん坊でした。泣き叫ぶ幼子の声を背後に聞き、それでも船上の人にならざるをえなかった私の人生。あの頃、女性が船に乗るなんて御法度の時代でした。女性は汚れているから？なんて事も言われましたが何よりも船の神様は女性であり、そこに同性が乗ると嫉妬心をあおるからとも言われました。昔からの言い伝えに反発し、荒波の戦場へ自分の意思で立ち向かった……あの頃……怖いものなんて無縁の私でした。二十八年前の私は……それなりに輝いて、自分の人生の舳先を……希望へと漕ぎ出した。

女という事だけで批判、中傷を受け、それでも頑張れたのは夫の言葉でした。「近い将来、この船業にも女性の力が必要になってくる。他人を雇用するよりも息の合った夫婦でしか出来ないこともある。女が船に乗る事を、いつの日か世間が認めてくれると思う。そして一番大切なことは……自分達の生活は自分達の力で守っていかねばならないのだから～。良い結果を出せば数年後、数十年後には夫婦船が増えていくだろう。先駆者になって頑張ろう」これが二十八年前に夫が私に言った言葉でした。

女を使わなければ船も動かさない弱い男と陰口を言われた夫。大漁の日には僻まれて、不漁の時には笑われた。どう転んでも注目されたけれど、切ない時も、苦しい時も、悲しい時も、夫の言葉が私の心を支えてきました。いつの日か……海の上でも女性の価値が認められる日……そんな日を夢見て懸命に生きてきました。

あのころ、私の姿を追いかけて岩壁までヨチヨチ歩いてきた長男は三十才になり妻子を愛する素敵なお父さんになりました。背に泣き叫んでいた次男も二人の子を授かり大黒柱になりました。親になってみて……子供に後ろ髪を引かれながらも……それでも船に行かなければならなかった母の想いを……理解してくれただろうか。歳月が過ぎ、潮風にさらされた私の肌、ゴツゴツとした太い指。頑張ってきた証だと言いきるにはまだ早いけれど……後悔だけはしたくない。

二十八年前、注目をあびた夫婦船が今では、我が港に十艘活躍しています。

良い時代になりました。

## いもいっしょ

水木 亮

私が家族の食事担当になったのは、長男が産まれて保育所に預けた時からである。私達は共働きで、当時私は高校の定時制勤務だったから午前中は時間があり、養護学校で働く妻はいつも忙しく、早朝出かける妻に代わり洗濯や食事の買い物をした。妻の帰宅が遅くなる時は夕飯の準備をする。一番簡単なのはカレーで、後は炊飯器のスイッチを入れておけばよい。毎日カレーというわけにはいかないから月曜はカレー、火曜日はチャーハン、水曜日は揚げ物、というようにウィークデイは定食で、日曜日にはトンカツや焼き肉という、ご馳走の一品を加えた。

子供が中学生になると、妻の弁当に加えて子ども達の弁当も作ることになり、焼き魚に野菜というシンプルな弁当は、見た目もきれいな余所さまの弁当と違い、腹一杯になればいいというところがけであった。この点、子供が二人とも男の子だったことを感謝している。女の子なら恥ずかしい思いをしたらろう。

反抗期を迎えた子供は、わかっていても素直に親と向き合うことをしない。たまたま中学生の息子が万引きをしたことがあった。友達に誘われて、彼の言うままにゴーグルを一点万引きした。その店に呼び出された妻は恐縮しひたすらあやまった。妻は自分たちが共働きしている、それも教職にありながらそのようなことになったことを恥じて、学校を辞めると言い出した。私達は息子と三人で夜遅くまで話した。

思えば、彼は保育園ではいつも最後に一人で親のお迎えを待っていた。寂しがり屋の彼と一緒にいる時間が少ないことは私も妻もいつも気になっていた。そういう彼がしでかしたことに私達は親の責任を感じた。私も叱ることは当たり前だが、本当にそれがよくないことで、私と妻がどんなに悲しい思いをしたか、それを彼にどう伝えればよいか悩んだ。

朝、弁当の白い御飯の上に、ピンクのソボロで幾つも小さなハート型を作った。海苔を細く切り、「いつもいっしょ」と書いて、蓋を閉じた。彼はいつものようにそれを持って学校に出かけた。

妻は出張で泊まりで出かけていたので、夜帰宅した私は明日の朝のために弁当箱を洗った。蓋を開けると紙切れが入っている。

「こんどのごめんなさい。カラアゲおいしかった。『いもいっしょ』ってなんのこと？」とあった。「つ」の字の海苔がどうやら蓋についてしまったらしい。

## イメージの力

森山 七海

『男女差別』というような大層なことではありませんが、私が小さい頃に体験し、感じたことにそいながら、私なりの考えを書いてみようと思います。

私は小学六年生のとき、運動会で応援団長をしました。やろうと思った理由は二つあります。一つは、小学一年生のときからやりたいと思っていたから。もう一つは、私が五年生のときに応援団長をしていた一つ上の女の先輩がとてもかっこよかったからです。それまでは、女子が応援団に入っているのは何度も見たことがありましたが、応援団長が女子というのを見たのは、その先輩が初めてでした。

その時、

「女子の方がかっこいいやん☆」

と思うと同時に、

「女子でもできるんや。」

と思いました。別に、「応援団長は男子。」と決まっているわけでも、誰かにそう言われたわけでもありません。なのに私は勝手に、「応援団長は男子。」と思いこんでいました。それは多分、『団長』といえば、力強いイメージがあり、それが『男子』というイメージと結びついていたのではないかと思います。

現代社会にも目を向けると、そういう職業はたくさんあると思います。例えば総理大臣。国の代表というと、やはり男性のイメージが強く、実際男性しか見たことがありません。政治家も男性のイメージが強いですが、最近は女性も増えてきたように感じます。

反対に、男性側から見ても同じ事が言えると思います。

私が中学生のとき、吹奏楽部が大人気でした。部員は全員女子でしたが「そういうものなのか。」とあまり気にしていませんでした。しかし、その次の年の新入生で入部希望者の中に、男子が二人いたのです。ここでも、「吹奏楽部は女子のみ」と決まっているわけでもないのに驚いてしまいました。その時、「イメージの影響力はすごい!!」と思いました。

リーダー的な事は男子、人の世話をするのは女子。こういう思いこみは、これから捨てていかなければならないと思います。そういうイメージが頭にうめこまれることで、『男女差別』につながっていくんだと思います。私たちのこれからの課題は、「男女に対する固定観念を捨て、やりたい事に挑戦する!!」だと思います。(笑)